

脊椎脊髓病学 第3版

岩崎幹季 著

本書は初版が2010年に発行後、6年ごとに改訂を重ね、このたび第3版が発行された。著者の岩崎幹季先生は日本を代表する脊椎脊髓外科の専門医・指導医の一人であり、これまで数多くの脊椎外科医を教育・指導している。本書は大阪大学整形外科や大阪労災病院整形外科の研修医や整形外科病棟医に対し、岩崎先生が脊椎外科のマニュアルとして配布していた「脊椎外科クルズス」が原点となっている。当初は必要最低限の簡単なマニュアルだったが、後輩の先生方の要望や協力により内容が増えていったとのことである。この経緯だけでも本書が臨床医療に即した、実践的な内容であることが伺える。

本書の構成は「序章」「総論」「各論」となっている。序章では「歴史に残る医師の言葉」から始まり、あらためて医師が目指し備えるべき素養や志を認識できる。続いて「患者に接するときの留意点」や「インフォームド・コンセント」、「やるべきこととやってはいけないこと」は脊椎脊髓病医に限らず全ての医師に共通する、必須の内容となっている。

総論では、術前評価、術前準備、術後管理、合併症対策の順に解説され、「脊椎脊髓手術」を適切に遂行するための要点が記載されている。術前評価の章では、画像診断のために重要な所見に加えて神経学的検査も網羅されており、手術を行う脊椎外科医だけでなく、臨床神経学に興味がある医師や医学生にも有益な内容である。

ともすれば画像診断に頼りがちな整形外科疾患の診断であるが、特に脊椎脊髓疾患では理学的所見が重要と考えている。本書でも筋力評価の実際を見やすいシエマで解説し深部腱反射とともに、多くの紙面を割いて解説されている。脊椎手術の基本と実際では、脊椎手術の基本的手術手技の要点が紹介され、一般的な緊急手術の適応や術後の緊急再手術についても有用な内容である。また手術以外にも疼痛の薬物療法や、患者の医療費

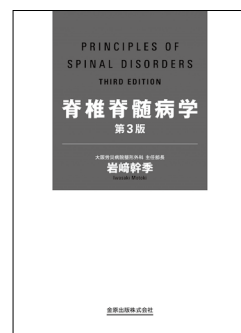
負担を軽減する公費負担医療制度の紹介、鑑別に悩む神経内科的疾患の概要も記載され、まさに脊椎脊髓病学の総論が纏められている。

各論は代表的な脊椎脊髓疾患それぞれについて、疾患の病態・疫学、症状、診断方法、保存治療、手術治療に分け詳述

されており、その症例に当たったとき、診断から治療まですべてを参考にすることができる。さらにこの第3版では新症例が多数追加され、最近の新技术である頸椎人工椎間板置換術や腰椎椎間板ヘルニアに対する椎間板内酵素注入療法も新たに加わっている。

一般的な脊椎脊髓疾患が網羅されていることはもちろん、比較的まれな脊柱変形についても特発性側弯症、先天性側弯症、症候性側弯、成人脊柱変形の章ごとにわかりやすく記載されている。症候性側弯で取り上げられている神経線維腫症、Marfan 症候群、Ehlers-Danlos 症候群、神経・筋原性側弯症、デュシェンヌ型筋ジストロフィー、キアリ奇形・脊髓空洞症は、頻繁に治療する疾患ではないかもしれないが、実際に症例を担当した際には注意すべき点が数多くあり、診療に大いに役立つ内容である。

本書全体を通じて、わかりやすい図表やシエマ、実際の症例画像が数多く採用され、大変見やすく理解しやすい内容となっている。脊椎脊髓疾患に従事している医師、これから脊椎脊髓専門医を目指す医師はもちろん、脊椎脊髓専門医でない医師も必携の、貴重な著書である。



今釜史郎（名古屋大学医学部整形外科）
〔金原出版、定価 16,500 円〕